

レヴィナスにおける〈自己〉について

岡田篤志

レヴィナス他者論は『全体性と無限』において、自体的に自己同一化する自我としての〈自同者〉(le Même)を〈他者〉(l'Autre)への関係の出発点としていた。その際、自—他関係は〈自同者〉と〈他者〉との分離を介した超越的な関係であった。しかし、レヴィナスは『全体性と無限』以後、このようないわば外部への遠心的方向ではなく、自我の内奥へと垂直に下る方向へと〈他者〉との関係を探るようになる。自我の「内面性」のさらにその深奥における〈他者〉への「開口」(ouverture)あるいは〈他者〉との「結び目」(le noeud)、それが〈自己〉(le Je)である。このような探求の方向の開発に導きを与えているのが、フッサール時間論の主要概念である「根源的印象」(Urimpression)である。本稿は、レヴィナスの「根源的印象」の理解の変遷を案内しながら、自我の深層を彷徨する〈自己〉の行方を追跡することによって、自我の存在そのものに構造化された倫理性を見定めることを課題とする。

クラウス・ヘルトはフッサールの遺稿の思想を徹底化することによって、フッサールにおいては往々にして静止的な存立のもとに前提されがちな自我極の自己同一性を、その「立ちとどまること」と「流れること」の根源的な時間化のもとで考え抜き、自我極の点性そのものの内部での自己分裂と自己合一という、自己同一性の差異を孕んだ内的運動を洞察した。⁴⁴だが、遡ること二〇年も以前にレヴィナスはフッサールの遺稿を参照することもなく、自我の自己同一性そのものうちに潜む自己関係的な出来事を見ていた。ヘルトは自我の単純な（とどまれる今）（*nunc stans*）を（転化の）なかでの（とどまれる今）（*nunc stans-in-Wandel*）⁴⁵へと動態化させたが、レヴィナスは自我の成立を、（内部に幅をもつて立ち止まっている）あるいは（立ち止まること）の（不可能性）（*in-stant*）⁴⁶としての現在の（瞬間）をもとに考察している。レヴィナスは一九四〇年に発表された「フッサールの業績」[“L'oeuvre d'Edmond Husserl”, in *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, janvier-février, n°129, p.33-85. Repris dans EDE, 7-52.]において、根源的印象について次のように書いている。

「それにしても、誕生や死といったあらゆる『事実性』から解放された意識一般の個性がいかにして可能であろうか。これこそまさに、フッサールが少なくとも刊行された著作のなかでは提起していない問題である。（……）しかし、フッサールにおいて自我そのものを、もはや能動性や受動性の概念が適応されない或る匿名的な出来事の契機として理解するならば話は別である。後に問題になる根源的印象という概念のうちには、このような方向への示唆を見出すことができる」（EDE:39）。

「このような方向」でのレヴィナスの議論が展開されるのは、捕囚生活のなかで準備され戦後出版される『実存

から実存者へ』ないし講演『時間と他者』においてである。レヴィナスは明言してはいないが、この著作で展開されているのはまさにフッサールの根源的印象からする自我の存在様式の性格づけであると云っても過言ではないだろう。その際、まずレヴィナスが示唆を汲んでいるのが、根源的印象の次のような性格である。

「根源的印象はそれ自身は産出されはしない。それは産出されたものとしてではなく、自発的発生によって生じるのであり、それは根源的発生である。根源的印象は何かから成長するのではなく（それは胚子をもたない）、それは根源的創造 (Urschöpfung) である」。

根源的印象とは、フッサールにおいて内的時間意識の根源的時間野を成す三肢構造の中心に位置し、この時間野のもとで連続的に延び広がっていくヒュレーの所与の最先端に位置する今意識に与えられる印象である。それはフッサールの『時間講義』においては今意識のもとでのヒュレーの対象の所与様式である。だが、「印象なくしては意識は何ものでもない」とフッサールが言うように、根源的印象はヒュレーの源泉点であると同時に、意識の始まりでもある。根源的印象は、先行する何らかのものから産出されるのではなく、持続する系列から連続的に生み出されるものではない。根源的印象はそれ自身からのみ発生する「根源的創造」であり、それはいわば「無からの創造」(creatio ex nihilo)である。レヴィナスが示唆を得ているのは根源的印象のこのような性格である。レヴィナスにとって「無からの創造」である根源的印象の存在様式は、自我の「誕生」の出来事であり、自我の自己同一的存立の秘密である。

レヴィナスは「実存者なき実存すること」(l'exister sans exister) — 「ある」(être) という始まりも終わりもなき存在の匿名の流れからの、存在する何ものか — 実存者の「誕生」を考える。この「誕生」は、純粹な動詞としての実存することが実詞の実存者へと転化する「実詞化」(l'hyphostase)である。この「実詞化」によって主語

なき匿名の実存することは実存者によって担われる。いまや実存者は実存する (『existant existe』)。そしてこの実存者の「誕生」、「実詞化」が生起するのが、現在の〈瞬間〉においてである。だが、この〈瞬間〉は単純な抽象的な点でも、没時間的な永遠への通路でもなく、むしろ〈瞬間〉はその点的抽象性それ自身のうちに、「固有な弁証法」を孕んで分節化されている。レヴィナスが問題にしている現在とは、実存者の「誕生」つまり、何者かが存在し始める現在であり、それは創造の現在、いわば特異点のような現在の〈瞬間〉であって、〈未来―現在―過去〉という時間を構成する不可分な連鎖のその中心が問題になっているのではない。「現在なるものを想定することによって、われわれは持続という直線的な連続の中から取り出された時間の一定の延長 (une étendue) を想定しているのではないし、この連続のうちの一点 (un point) を想定しているのではない。問題にされているのは、すでに構成されている時間の中から切り取られた現在、つまり時間の要素ではない」(TA32)。レヴィナスは「実詞化」としての現在を説明するために、或る種の「徹底した還元」を行使する。ヘルトによれば、フッサールはC草稿群において「徹底した還元」によって、未来地平、過去地平へと延び広がった意識流としての自我生を括弧に入れて、究極的に機能する純粋な自我現在―「生き生きとした現在」に考察の焦点を向けた⁶⁾。一方、レヴィナスの場合、現在の〈瞬間〉から未来―過去の次元を取り去り、現在を連続の中から分離する。つまり、連続的経過なし流れとしての時間をエポケーし、「実詞化」の現在そのものに隠された「内的弁証法」を露呈しようとする。現在とは〈未来―現在―過去〉という時間連続態から分離されて、それ自身に固有な弁証法、レヴィナスが「瞬間の弁証法」と呼ぶ事態のもとに考察される。

従来、今の瞬間は「二つの時間の境界に単なる抽象として存在する」もの、「理念的限界」でしかなく、それゆえに、常に一定の幅を持つものとして考えられてきた。レヴィナスは順次経過していく諸瞬間の流れの内部での

各々等価な一点としての瞬間ではなく、実存者が実存し始める「実詞化」の〈瞬間〉、つまり自我の「始まり、起源、誕生」としての現在の〈瞬間〉を主題とする。そしてこの〈瞬間〉は経過せず、むしろ「立ち止まる」。瞬間のうちで本質的なものは、その〈立ち止まり〉(stance)である。しかし、この停止には或る出来事が包み隠されている」(BE.133)。

流れのうちにある現在ではなく、自我の「誕生」そのものの現在は、実存者が実存と結びついて存在し始める存在論的出来事を知解するための「いわば存在論的図式」としての時間、「実存することと実存者とのあいだの図式的な機能を果たす時間、実詞化という純粹な出来事としての時間」(TA.34)である。この〈瞬間〉は単なる抽象点ではなく、また、持続でも「執拗な存続」(le persistence)でもないが、それは立ち止まる〈瞬間〉である。この〈瞬間〉がその内部に逆説的なある関係を隠しているのである。「実詞化」としての現在の〈瞬間〉は、未来や過去の次元からも、後続し先行する瞬間からも分離された。現在は先行する過去の系列に依存せず、そこから何も継承しない。また、後続すべき未来の連鎖にも何ら受け渡すべきものを持っていない。現在は過去から発するのでもなければ、未来へと消え去るのでもない。それゆえに、現在は純粹な自己準拠の境位のもとに捉えられなければならない。「現在は自己から発する。もっと適切な言い方をすれば自己からの発発である」(TA.32)。「それ自身から発して存在すること、瞬間のこのようなあり方、それが現在であるということである」(BE.125)。「現在は自己にのみ準拠し、自己に発し未来に抗うものである」(ibid.)。現在の〈瞬間〉は「その単純な一撃」のうち、「自己からの発発と自己への帰還」(un départ de soi et un retour à soi)という「自家固有の関係」(une relation sui generis)を、自己内部での運動を抱え込んでいることになる。〈瞬間〉は単なる点ではない、いやむしろ、その点性そのものうちに自己関係の運動による分節化を孕んでいる。

レヴィナスは「創造」にまつわる逆説を手がかりにする。たとえ創造者やあるいは原因が想定されたにしても、創造の〈瞬間〉における被造物の存在し始めることそのことには逆説が不可避である。

「存在し始めるものはその始まり以前には実存しない。にもかかわらず、みずからの始まりによって自己自身へと生まれ出、どこから発したということもなく自己へと到来することになるものは、その実存しないものである。この始まりの逆説、それが〈瞬間〉を構成している」(BE130-131)。

何ものかが存在し始める出来事を、空間移動を含蓄する言語でしか語りようがない時にこのような逆説が生じる。が、レヴィナスはこの逆説を活用して、「根源的創造」である根源的印象の瞬間の単一性を「ほぐす」。つまり、存在し始めることの起点と到達点の両者を、この創造の〈瞬間〉それ自身の内部へと送り返し、〈瞬間〉そのものの存立を〈自己〉からの出発と自己への帰還」という自己関係的運動と捉えて、〈瞬間〉の点性をそれそのものとして二重化する。〈瞬間〉はそれ自身から発して、それ自身へと到来する。だが、それはすでに成立している時間の一定の隔たりを飛び越えることではない。「瞬間の本質、瞬間の成立は、この内部の隔たりを飛び越えることのうちにある」(BE131)。したがって、現在の〈瞬間〉は内部に自己自身との「ずれ」(le décalage) ないし「遅れ」(le retard) を抱え込んでおり、自己自身と決して一致することはできない。レヴィナスが呈示する〈瞬間〉はこのように〈内部に幅をもつて立ち止まっている〉(instance) のであり、それと同時に自己自身と一致することはできず、没時間的に静止して〈立ち止まることができない〉(instance) のである。

こうした内部に分節を孕んだ現在の〈瞬間〉が、実存の匿名の流れのただ中での実存者の「定位」(position)、「自我の「誕生」の真相、「誕生」からする自我の自己同一的存立の真相を理解させる。いま見てきたような「実詞化」の現在によって一個の実存者が成立し、自我が表明される。「現在とは、実存の匿名のざわめきのなかで、こ

の実存と格闘しそれと結ばれ、それを引き受けるひとつの主体の出現である」(EE:48-49)。だが、〈瞬間〉の境位が示すように、自我は〈自己〉からの出発と自己へへの帰還によって「誕生」する。ここに「自我の自己へへの繫縛」(l'enchaînement à soi) が明らかになる。自我は匿名の「ある」を断ち切って自己表明する。だが、その自由はたちまち自己それ自身への拘束に転ずる。自我はただ単に存在するのでも、自我の外部へと志向的に超越しつつ存在するのでもない。「実存する」という事實は、実存者を実存に結びつける或る関係が含まれている。実存するということ実は二重性であり、(……) 自我はひとつの自己を所有しており、そこにみずからを反映させるだけでなく、それと伴侶あるいはパートナーのように関わっている」(EE:37)。「実存の運動は(……)〈存在する〉という動詞のうちはその再帰動詞としての性格を露呈させる。すなわち、人は存在するのではなく、人はみずからを存在する(on n'est pas, on s'est.)」(EE:38)。

自我の「誕生」は自我の自己へへの自己拘束でもある。自我は自己と一致することもできなければ、この自己を振りほどくこともできない。それゆえに、レヴィナスは「怠惰」、「疲労」、「努力」という奇妙な実存様態を語るのがある。「怠惰」とは、自我がその「誕生」と共に担った自己への不可能な拒絶であり、「疲労」とは自我がみずからの現在へと追いついて一致できない遅延であり、「努力」はこの遅延を取り戻そうとして果たせない努力である。自我はその「誕生」の若々しさにもかかわらず、「誕生」そのものからして「生き生きした源泉からの断絶」(EE:50)である。しかも、この「断絶」の隔たりの連携は解かれることはない。自我は自己と一致できないまま、自己と共に(avec soi) ある。

こうしてわれわれが主題としている自我の自己同一的存立の真相が明らかになる。自我の自己同一性は、論理的な自己同一性によってではなく、むしろそれ以前に、自我の「誕生」の自己同一化、つまり〈自己〉からの出発と自

己への回帰」という「自己同一性の活動」(œuvre de l'identité)から理解される。それは「根源的創造」である根源的印象の存在性格から理解された「誕生」から由来する自我の自己それ自身への関係性である。自我の単一性そのものが単一ならざる自己の二重性なのである。この自己の二重性は、すでに成立している自我の自己への反省によつてはじめて可能になるのではない。またそれゆえに、自我は繫縛されている自己へと距離を保つことはできず、この自己関係性は「重苦しさ」、繫縛の「容赦なさ」であり「孤独の悲劇」である。自我は「自己に礎になつてゐる」(rive à soi) (EE:136)。

レヴィナスは、先行するものから産出されずみずから発生する根源的印象の存在性格に範を採り、自我の自己同一性をその「誕生」から考えることによつて、自我の点性そのもののうちに自己二重化の関係性を見出した。自我はその「誕生」からして純粹な自己準拠の境位にある。自我は自己へと繫縛されている。自我は自己へと責任を負っている。『時間と他者』、『実存から実存者』の論述に従えば、この自我の孤独は、いまひとつの「時間」、つまり自我の現在とは何の共通性もなく、自我はそれを予期することも未来予持することもできない「まったき不意打ち」(AG64)である純粹な「未来」の次元から到来する「女性的なもの」(le féminin)とのエロスの関係を介して、拘束されている「自己」が「子」として他者化されることによつて解消されるに至る。だが、レヴィナスの思索はこの地点からさらに半世紀に互つて続行される。根源的印象と「自己」の再解釈に注目することによつて本稿は自我の「謎」を追跡する。

前節では根源的印象は、「現在」において存在する自我のその純粋な自己性の存立、つまり自我の自己それ自身への関係を理解するものとして解釈されていた。⁽⁷⁾ 一方、この段階まで、レヴィナスにおいて自我と他者との関係はこの自我の自己性としての根源的印象の現在を超越し、この現在と何ら共通なものを持たない「純粋な未来」が逆説的にもまさにこの現在に介入する出来事であり、そしてこの位相差を孕んだ隔時的な (diachronique) 出会いこそが〈顔〉との対面であった。ところで、過去把持の裏返しでしかない未来予持を越えて到来するこの「純粋な未来」は、出会うものすべてを自己固有化する自我の活動領域に対して「まったく新しきもの」(TA71) である。だが、「まったく新しきもの」とはまさに根源的印象そのものではなかったか。

「(根源的印象、それは) 根源的に発生したものの、〈新しきもの〉であり、意識自身の自発性によって産出されたものとは反対に、意識とは無関係に発生し、感受されたものである」(挿入筆者)⁽⁸⁾。

レヴィナスは、今度は根源的印象のこのような規定に焦点を当てて、根源的印象そのものの他者性から自我と〈他者〉との関係の解明に向かう。それは一九六五年のフッサール論「志向性と感覚」(“Intentionalité et sensation”, in *Revue Internationale de Philosophie*, n°19, pp.34-54. Repris dans EDE, 144-162.) におおつて開始される。

この論文においてレヴィナスは、「志向性の使信」が意識から排除しなければならないはずの感覚概念が、フッサール現象学において志向性の根底に温存されていることに注目する。が、だからと言ってフッサール現象学の経験論への依存を非難するのではなく、むしろ感覚概念が志向性そのものの意味を深めることを可能にさせるとする。フッサールにおいて、感覚つまりヒュレー的所与は、統握に与えられる単なる素材としての役割を越えて、「時

間、「身体」の志向性を邇示する。レヴィナスは、意識に外在的な時間を前提せずに、意識内在そのものの内で初めて時間を構成する意識の問題、つまり「内的時間意識」の問題における過去把持ないし未来予持の志向性の普遍性を主張し、意識を「過去へと遅れる仕方」(EDELIS)であると規定する。フッサールにおいて時間を構成する意識もまた志向性である。だが、それはすでに与えられたヒュレー的与件の生気づけとしての、強い意味での作用(Akt)の志向性ではない。時間の志向性、それは、ヒュレー的与件が射映として一定の持続のもとにおいて与えられるその現場で働いている。つまりレヴィナスによれば、「時間は感覚の感覚すること」(EDELIS)そのことである。そして、時間を構成する感覚することとしてのこの志向性においては、感覚することと感覚されるものとは一致せず、両者の間に「隔たり」(a distance)が存しており、この「隔たり」がそのまま「時間的隔たり」である。過去把持は「もはやない」ものの「なおここに」であり、未来予持は「まだない」ものの「すでにここに」であり、両者はその単純な感覚することのうちに時間を成立させる位相差―「変様」(Modifikation)を含んでいる。そして、「絶対的主観性」としての時間を構成する意識がもはや外在的な或る時間によって計られず、またその後には不動のさらなる意識を前提しない以上、「過去把持することないし未来予持すること」(思考)は「隔たつてあること」(出来事)と合致する」(EDELIS4、挿入原文)と言わざるをえない。つまり、「一についての意識」がすなわち「流れ」なのであり、「流れ」を確認する意識が「流れ」そのものの実現だということである。

だが、過去把持が意識する「隔たり」は「自己変様する或る根源的印象のまったく新しい根源的印象に対する隔たりである」(EDELIS3)。「隔たり」を確認するのは過去把持であるとしても(またこの確認が時間的隔たりの実現である)、「隔たり」の生起そのものは新たな根源的印象の意識への介入―「根源的生起」(Urgescheis)⁹⁶である。「流れは根源的印象の変様でしかない」(EDELIS5)以上、根源的印象そのものは「絶対的に変様されざるもの」⁹⁷で

あるはずである。もちろん、フッサールにおいて根源的印象は、時間的な差異あるいは時間としての差異を記述するための「理念的限界」である。しかし、フッサールにおいて、それはまた「目覚めた意識」、「新しい今へ向かう今の生」の生動性を印すものである。レヴィナスは根源的印象を単に時間の記述のための一契機として抽象的なものとして考えるのではなく、むしろその点性の抽象性そのものを「生」の最深相に存する或る出来事に到達するための指標にする。根源的印象は「その他一切の存在と意識の源泉」であって、この「印象なくして意識は何ものでもない」。しかし、レヴィナスによれば、意識はすでに過去把持ないし未来予持による根源的印象の「変様」しか手にしていない。意識自身が「それ自身に遅れており、過去へと遅れる仕方」(EDE 155)であるからである。「流れ」と「変様」はもはや強い意味での作用でなく受動的に生成するのであっても、それは意識であり、感覚は意識の相関者として流れることよって同一化され観念化される。だが、未来予持や過去把持の観念性を越えて実現される「現在の新鮮な先端であり絶対的なもの」としての根源的印象は、「すぐれて非観念的である」。ここにレヴィナスは意識への〈他者〉の介入の現場を見る。

「内容の予見不可能な新しさが、一切の意識と存在の源泉において生じてくる。(……)それはあらゆる予見、予期、萌芽、連続性を越えて実現される。したがって、それはまったく受動性であり、〈自同者〉(le *«Même»*)の深く内部に入り込んでくる〈他者〉(un *«Autre»*)の感受である」(EDE 156)。

根源的印象は無から存在(意識に¹³対しての¹⁴存在)への移行、つまり「根源的創造」である。したがって、根源的印象は無でもなければ、すでに意識によって保持されている「変様」でもない。ということとは、根源的印象の在処は無と意識の間ということになる。これをレヴィナスは一旦はフッサールの言う「内的意識」(inneres Bewußtsein)¹⁵であると考へる。「内的意識」においては、それが変様されざる根源的印象の相関意識である以上、

「知覚と知覚されたものが同時である」。また「ここでは形式と質料の区別がない」。だが、意識はすでに「変様」の保持であるゆえに、レヴィナスはこの「内的意識」を意識から区別している。『内的意識』それは過去把持の時間的変様によつて意識となる」(EDE.156)。

それではこの「内的意識」においては、意識は〈他者〉と融合しそれと一体化しているのだろうか。レヴィナスの言う〈他者〉との「近き」(le proximate)ないし「接触」(le contact)は自—他の直接的合一であろうか。あるいは端的に言つて根源的印象の「新鮮な先端」は存立しうるだろうか。「変様」ないし「流れ」における綜合、同一化、つまり意識による〈他者〉の観念化が、〈他者〉との疎隔化、「遠さ」であり、自我を裁き来る〈他者〉のその切迫した「生き生きした」衝撃の緩衝である限り、それはそうである。しかし、レヴィナスはここにどどまらないう。「内的意識」という融合点は単なる通過点であつて、さらにその深部に存する真相へと遡行しなければならぬ。その際、変様—変様されざるもの、現前—非現前、意識—無意識、能動—受動等の二項対立図式は乗り越えられなければならない。こうしてレヴィナスの用語法に、「痕跡」(le trace)、「不可逆的な過去」(le passé irréversible)、「あらゆる受動性よりも受動的な受動性」(la passivité plus passive que toute passivité)等の奇妙な概念が出現してくるのである。

変様されざる根源的印象を受容する「内的意識」は、対象化されるものと対象化するものの融合点であり、非志向的意識である。だが、『存在するとは別の仕方で、あるいは存在することの彼方へ』においてレヴィナスは、〈他者〉としての根源的印象の直接性を一切の意識から追放する(Cf. AE.41-43)。一方、フッサールにおいては「意識はそのどの位相においても必然的に意識で」あつて、「根源的与件も、対象化されることなく—しかも『今』という固有な形式で—意識されている」のであり、したがつて「無意識的な内容の過去把持というようなことは不可

能である」ことになる。なるほどフッサールにおいては、意識のうちで時間—時間的位相差を構成するために、「今」が限界づけられなければならないことは確かである。だが、レヴィナスはフッサールの問題設定を越えて、「他者」との関係の時間性のために根源的印象の現在のさらに手前へと位置づけようとする。しかし、根源的印象の現在を無意識のうちに沈め去り、意識との関係を途絶させる訳ではない。むしろレヴィナスの課題は、根源的印象が位置しているはずのこの「無意識」を、「存在—無」、〈現前—不在〉の二項対立図式ではない仕方での存在性格を語ることにある。それが「痕跡」(le trace)、「謎」(l'énigme)であり「無起源的な外傷」(le traumatisme an-archique)である。では、未来予持の可能性を越えて到来する衝撃的な根源的印象の現在ならざる現在とはどういう意味であろうか。

レヴィナスは『全体性と無限』において、〈顔〉の表出を「生ける現前」(une présence vivante)、「現在化の営み」(la présentation) (Cf. TT 39-41)と規定していた。それは直観への所与様式ではなく、視覚に与えられる形態あるいは意味付与された意味を不断に破壊しつつ現われる顕現であり、すべてを享受し、あるいは事後的にもすべてを表象化する〈自同者〉としての自我が、みずからが了解し内包しえないものを迎接することである。ということは、フッサールにおいて根源的印象の現在が、過去把持との連携によって意味付与へと方向づけられた所与の集約、綜合に参与する以上、〈顔〉の現在をむしろこの現在をそれ自身を凌駕すると言わなければならない。〈顔〉は意識の実質を成す意味に対する「超過」(l'excèsion)、「剰余」(le surplus)をもって自我へと介入する。ここに奇妙な事態が生じる。つまり、この超過ゆえに〈顔〉の現在は現在とすらなることなく、意識がそれを受容する現在の手前ないし彼方へとすでに逃げ去っていることになる。このことは『全体性と無限』以降明確になる。〈顔〉という「至高の現前」は「顕現における離脱」(absolue)であり、「たしかに訪れたのであるが、訪れたよりも先に

レヴィナスにおける「自己」について

立ち去った異邦人」(EDE:210)である。その現在の直接性は、「隣人にとり憑かれ、とり囲まれた (ob-seđante) 近さであり、それは意識の次元に宿らない。それは欠陥からではなく、過剰さ、接近の『超過』によってである。(……) この過剰ないし『超過』ゆえに、近さは意識においては常にアナクロニツクな現前である。意識は常に隣人との待ち合わせに遅れる」(EDE:229)。(他者)との出会いである根源的印象の現在はその法外さゆえに現在にすらならず、フツサールの言う「時間の庭」としての現在化の領野において綜合されることもない。またそれゆえに、かつての現在として再現前化されることもない。換言すれば、それは核的な現在にも、現在化の幅をもった現在にも、想起によって現在へと喚起可能な地平の全体としての「現前」にも属さない。(他者)との接触としての根源的印象は、知覚綜合を逃れる「外傷」として意識に流入し、現在を通過することもなく「過去」へと沈み込む。根源的印象の衝撃はみずからの現在を脱臼して「過去」へと転じる。だが、この過去は意識が思念する意味に対するその不均衡、無秩序ゆえに「一度も現在となることのなかった過去」であり、したがって「再現前化可能などんな起源よりも古き過去」である。フツサールにおいては、「今」の刻印を押されて時間的に個体化された根源的印象は、過去把持によって保持されたまま時間図表の垂直の系列に沈降して行く。沈降した与件は意識の自発的な想起によって任意に再現前化可能である。ところが、自我の容量を超過して到来する(他者)の現在が転じた過去は、想起の射程の彼方へと遠ざかる。あまりにも遠い過去ゆえに、つまり想起の有限性ゆえにはなく、この「過去」はそもそも現在となることがなかったものであり、過去把持によって想起可能なかたちで経過した時間系列のうちに個体化されていないからである。(他者)との接触の根源的印象は、現在化の所与として集約されることも、再現前化されて現在へと共時化されることもない。根源的印象は絶対的に過ぎ去っている。それは不可逆的で、現在へと回収不能な、記憶不可能な過去として経過する時間、つまりいかなる現在とも共通な尺度を有することなき「隔

時性」としての時間、始原なき、起源なき時間の「流脱」(le laps)ないし「老い」(le sénescence)である。

さらに、現在となることもなく絶対的に過ぎ去った過去は無ではなく、「痕跡」である。だが、この「痕跡」はかつての或る現在が刻んだ痕ではなく、この「痕跡」を過去へと追ってもその起源である現在に到達されることはない。「痕跡」は過去を指示する。が、この過去は意識が集積する過去把持の系列には見出されない。それは意識のうちに配置されるあらゆる過去からも遙かに隔たった或る過去へと向かう。それは意識の現在にすらならなかった〈顔〉の法外な根源的印象の「痕跡」、「過剰なもの、内包されることのあるもの、すなわち内容ならざるものの痕跡」であり、それゆえに「一度も現在と化したことのない過ぎ越しの痕跡」(AELI6)である。

こうして〈他者〉との対面の衝撃としての根源的印象は、それが今ある感覚与件として意識され現在化的綜合に供されることなく、現在それ自身の手前へと抜け去り、起源としての現在なき回収不可能な過去へと沈み込んで行く。それはいわば非根源的印象と化して意識の手前で、意識を越えて感受される。フッサールにおいて根源的印象は、「意識とは無関係に発生し、感受されたもの(Empfangene)」であった。ヘルトは根源的印象のこの「根源的生起」を、最も受動的な綜合ないし触発の受動性からも區別して「原受動性」と性格づけた¹⁹。というのも、「根源的生起」はいかなる自我の関与、傾向の影響をも受けていないからである。一方、レヴィナスにおいて非根源的な根源的印象は、今として意識されることも過去把持による現在化的綜合の集約に与えられることもなく、その感受は自我の綜合―それが受動的であれ―の能作(à act)に供されることはない。レヴィナスは、みずからが解釈する根源的印象の「受容」(la réception)ならざる「感受」(la susception)の受動性を、「いかなる受動性よりも受動的な受動性」であるとす。レヴィナスはこの表現によって、〈能動―受動〉の対連関の枠内に属することのない「絶対的な受動性」、自我の能動性に反転することのない「裏返しえない裏」としての受動性を示そうとして

いる。確かに、フツサールにおいては根源的印象の生起やそれを保持する過去把持の増殖は、ヘルトの言うように原受動的な運動である。だが、根源的印象が意識の現在として確保されるがために、この原受動的な運動の経過も想起可能であることよって現在へと回収可能である。「フツサールにおける感覚の時間は回収可能なものの時間にすぎない」(AE43)。レヴィナスにとつては、フツサールにおける根源的印象の「感受」ですら、なお「受容」である。そして、受容性とは「それでもなお衝突してくるものを引き受ける能力、迎え入れという発意」、「引き受けに転じる被ること」、「予見され同意された体験」である。それはあくまで衝突についての意識であつて、〈能動―受動〉の枠内における受動性ではない。レヴィナスにおいては、非根源的な根源的印象は現在とならず、回収不可能な仕方では想起不可能な過去へと過ぎ去る。根源的印象の衝撃は意識の警戒線に触れることなく、「外傷」として意識の現在の手前で感受される。また、この触発は、触発の現在ないし触発するものを意識に対して絶対的なかたちで隠している。「無起源的触発」、「他己触発」(hetero-affection)である。触発の「始動因は意識の外部にある」(AE129)。レヴィナスによれば、こうした絶対的受動性としての根源的印象の感受の可能性が「可傷性」(la vulnérabilité)であり、外傷への「曝露」(exposition)である。そして、このような意味での「感性」こそが〈他者〉との関係の場所である。自我は自己の意に反して根源的印象の打撃へと曝されているのであり、その打撃は想起不能な仕方では遙かな過去へと経過する。自我は絶対的な過ぎ越しの「痕跡」を起点として、みずからの起源―現在の手前へと開口しているのである。

意識や知の手前、あらゆる体験、受容の起源としての現在の手前において、根源的印象は想起不可能な仕方では自我を触発する。それは意識以前の主体の感受性によつて蒙られた「外傷」である。このように解釈された他者としての根源的印象は、自我の自己同一性に触れずにはおかない。裏返しえない受動性によつて〈他者〉から触発され

続ける自我の自己同一性の深奥ではどのような事態が生じているのだろうか。議論はこうして再び自我の自己同一性の深みへと降下されなければならない。

III

レヴィナスはまず根源的印象のその胚子を持たない「根源的創造」という性格から示唆を受けて、二重性のうちにある自我の自己同一的存立をその「誕生」から理解した。一方、前節で見たようにレヴィナスは60年代の後半から、変様されざる非観念的な根源的印象を〈他者〉との関係として解釈するようになった。それは能動性に転化可能な受動性を越えた「いかなる受動性よりも受動的な受動性」によって、意識の現在の手前で蒙られた「外傷」であった。レヴィナスはこの二つの根源的印象の解釈を綜合し、自我、主体性の深層の倫理性を提起しようとする。その際、キーワードとなるのが再帰代名詞〈自己〉(Se)とその強勢形(Soi)という概念である。

40年代の議論によれば、自我の自己同一性は「無からの誕生」として〈自己からの出発と自己への回帰〉という自己二重化的な自己同一化によって成立していた。自我はその「誕生」そのものからして不可避的に自己(Soi)との繫縛にあった。自我は「みずからを存在する(Se)」。だが、この時期レヴィナスは自我をこの自己との繫縛から解放する方向に議論を向けていた。それは純粹な未来としての「女性的なもの」との対面によって、自我の自己が「子」として他者化されることであつた。もはや自我は直接的にみずからの自己に回帰するのではなく、他者化されている自己に係わるることによってむしろ自己の彼方へと超越することになる。したがって、〈自己〉とは自我の自己であると共に自我の〈他者〉への超越の開口部でもあるという二義性によってすでに捉えられている。そし

て、〈自同者〉と〈他者〉との分離と対面という水平的な配置で自—他関係を理解していた『全体性と無限』以後、この〈自己〉の二義性が強調され、自—他関係が「〈自同者〉のなかの〈他者〉」として、自我の深奥、自己の手前の〈自己〉へと垂直に降下する方向に探られることになる。

〈他者〉として理解された非根源的な根源的印象は、意識の現在の手前において感受されていた。この感受は能動性へと転化不可能な絶対的受動性において蒙られるものである。したがって、このような根源的印象に対して自我は「主体」として出会うのではない。レヴィナスによれば、裏返しえない受動性において感受される〈他者〉としての根源的印象に応答するのは、「対格」における〈自己〉(Se)である。だが、この対格の〈自己〉は主格を起点として活用したのではなく、その絶対的受動性ゆえに主格に先行し主格へと格変化不可能なものであり、意識の現在へと回収され自我(Moi)に我有化されえないものである。自我は、時間流の隔たりにおいて反省可能な自己意識のさらに手前において、対象化してみずからに同等なものと見なすことのできない対格としての〈自己〉に先行されている。自我に対する〈自己〉のこのような無起源的な先行性は、再度、自我の「被造性」(écreaturalité)によつて解釈されている。

「自己自身は自己を形成しえない。自己自身は絶対的受動性によつてすでに形成されたものであり、この意味において自己自身は、どんな能動的引き受けをも麻痺させる迫害の犠牲者である。もしこの引き受けが自己自身のうちで覚醒しえるとするなら、自己自身は自己に対して定立されることになる。自己自身が形成される受動性とは、一切の記憶、一切の想起の手前で、不可逆的に過ぎ去つたものとしてすでに結ばれた結合の受動性である。想起によつて再現されるような現在と等価なものと化すことなき回収不能な時間のうちで、誕生と創造の時間のうちで、この結合は結ばれる(……)」(AE:133)。

「根源的創造」である根源的印象は意識の源泉であった。フッサールのようにこの根源的印象をあくまで意識とするのではなく、意識以前の「無意識」において感受される現在の手前の「外傷」とするならば、自我の「誕生」、創造の瞬間は自我そのものには意識されなまま記憶不可能な過去へと経過してしまっていることになる。そして、自我の現在には回収できない仕方ですでに生じた自我そのものの「誕生」、それが〈自己〉である。自我の〈自己〉は、自我それ自身の自由や発意を越えてすでに結束している。〈自己〉は自我そのものには隠された自我の「誕生」の源泉として、自我の深奥に位置している。すでに自我の自己同一性は〈自己〉からの出発と自己への回帰」という二重性によって理解されていたが、今回はさらに出発点ないし回帰点としての自己が、自我の自己同一性のさらに手前の想起不可能な過去性の次元へと送り返されることになる。「思い出すことのできない過去から自己自身は到来する」(AE136)。「自己自身の再帰は現在の手前へと送り返される」(AE133)。「自己」の「再帰」(a recurrence) はもはや自己への繫縛でも、時間流を媒介として自己同一化する自己意識の回帰性でもない。それは自我の自己同一性の手前への通路である。「自己」への再帰のうちには、自己の手前に向かう運動が存している。自己同一性の場合とは違って、AはAに回帰することなく、その出発点の手前に後退する」(AE145)。「自己のうちへ、自己に休らうことの手前へ、自己との合致の手前たる〈自己〉のうちへ、主体は放逐される」(AE138)。「このように自我の自己性の境位は、その被造性から再度解釈されることによって、自我はその基底において、みずからの現在に回収しみずからと同等なものを見なすことのできない無起源的な〈自己〉を蒙っているものとして捉えられる。さらに、このような自己性の境位はまた〈他者〉との関係のうちにある主体性の在り方である。それと言うのも、前節で見たように創造の瞬間としての根源的印象は同時に〈顔〉との対面の現在でもあったからである。したがって、自我は自己を越えて〈自己〉に再帰することによって、〈他者〉に直面しているので

ある。

その顕現の法外さゆえに現在にすらならなかった〈他者〉との接触としての根源的印象は、無起源的な仕方では絶対的な受動性において感受されていた。このような〈他者〉との接触のうちにあるのが、対格としての〈自己〉である。この〈自己〉が〈他者〉に触れている。つまり〈自己〉は自我の内奥における〈他者〉への曝露である。

レヴィナスにおいて〈他者〉との関係は常に徹底的に「倫理的」である。対格 (accusati)、それは「告発」(accusation) であり「審問」(a mis en question) である。さらに告発は「迫害」にまで到る。「自由な意識としての自我に対する告発は、根拠なきものとして、意志のどんな運動にも先立つ告発であり、強迫ならびに迫害としての告発である」(AE140)。〈自己〉という告発は「問いかけに先立つ迫害ないし審問」であって、いかなる自我の弁明をも許さない。それと言うのも、告発は自我の無起源的な「前史」(pre-histoire) に由来するものであって、自我によつて犯された何らかの過失ゆえにはないからである。この言われなき告発、迫害は単なる働きかけられることの受動性を越えた絶対的受動性のうちにある。それゆえに、迫害は〈他者〉によつて迫害されることにとどまらず、その当の迫害者に対する責任に転じる。「迫害の受動性を全面的受動性あるいは絶対的受動性と形容するのは、迫害された者が迫害者に対して責任を負いうる場合を描いてほかにない」(AE144)。それは「蒙られた侮辱から迫害者に対する責任への移行」である (ibid.)。「責任」もまたレヴィナスが呈示する自己他関係の中心である。だが、この責任は意識のうちに住まうことなく、自由な主体が為すいかなる参与や契約に先立つてすでに結ばれている制限なき、時効なき責務である。責任の発生する時点は〈自己〉が結晶する時点、つまり「創造」の瞬間であり、それは意識に回収不可能な過去として絶対的に経過してしまっている。倫理的関係の拘束される場は、レヴィナスにおいてはすべてこの無起源的な〈自己〉である。それは自我の意に反してすでに一挙に「全面的に結

び付けられている」。だからこの責任を自我は引き受けることも、拒否することもできない。引き受けるやいなやそれはさらに増大するのであり、またそれを拒否して自我は自己の内面に閉じ籠もろうとしても、内面の「臓腑」には「自己」という「他者」への縫合されざる傷が口を開けているからである。

ところで、「責任」とは帰責性が集中する責任主体の自己同一性と同時に、それに対して応じるべき「他者」への関係を含んでいる。だが、レヴィナスの言う責任はその起源を意識のうちに持つことのない「言われなきもの」、「限界なきもの」である。したがって、その際、責任主体の自己同一性は自我ないし意識のそれではありえない。それは意識の手前で無起源的に結束している「自己」の「唯一性」(unicité)である。この意味において「自己」とは「一者」(un)である。だが、この制限なき責任の主体としての「一者」はそれ自身のうちで休らう実体ではない。その一性は責務の無起源的な既決さとその不可避性、代替不可能性を意味している。「他者に対する責任においては、私は代替不可能な一者である。責任を転嫁しえない限りにおいて、私は一者である」(AE.131)。「他者たちに対する責任のうちで、〈自己〉自身は解くことのできないものとして結節する」(AE.134)。しかし「責任とはあくまで〈他者〉への関係である。この側面をレヴィナスは分割不可能な「一者」の「核分裂」、「よじれ」と呼ぶ。それは法外な責任の担い手である「一者」が〈他者〉の「身代わり」(a substitution)になることであり、「一者」とは「他者のための一者」(un-pour-l'autre)であるからである。

しかし、レヴィナスによれば、この責任主体の自己同一性としての「唯一性」は、自我ないし意識自身によっては正当化されざる根拠なきものである。それが正当化されるのはあくまで「外部から同一化され」、「外部から指名され選ばれ」ている限りであり、その限りにおいてまた初めて〈私〉(je)なるものが成立する。われわれはさらにこの外部性とその指名の根拠を問わなければならないのではないだろうか。いや、われわれはそもそもそれを問

いうるだろうか。レヴィナスはあくまで次のように言う。「私は外部から外傷としての命令を授けられるのであり、しかもその際、私に命令する權威を、表象および概念によって内面化することもない。その際、私は『一体この權威は私にとつて何なのか』、『この權威が有する命令権は何に由来するのか』、『何をしたがゆえに、私はそもそもその初めから責務者であるのか』と自問することもない」(AE.110)と。われわれはそこに独断があると難すべきだろうか。いずれにせよ、われわれが「他者に対する責任以上に深刻なもの、それ以上に尊いものは何もない」(AE.58)と言うレヴィナスの言葉に同意する限りにおいて、〈他者〉との接触としての根源的印象のその鋭き点性はなお再考されなければならないことは確かである。

【註】

※ レヴィナスの著作の略記号は次のとおりであり、引用文は基本的に既刊の邦訳書を用いるが、一部変更した箇所もある。

EE…*De l'existence à l'existant*, J.Vrin, 1986. (Fontaine, 1947)

『実存から実存者へ』西谷修 訳、朝日出版社、一九八七年

TA…*Le temps et l'autre*, PUF, 1983. (Grioble-Paris, Arthaud, 1947)

『時間と他者』原田佳彦 訳、法政出版局、一九八六年

TI…*Totalité et infini*, Martinus Nijhoff, 1961.

『全体性と無限』合田正人 訳、国文社、一九八九年

EDE…*En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, 2e éd., J.Vrin, 1967.

AE…*Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, 1974.

『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』合田正人 訳、朝日出版社、一九九〇年

- (1) Klaus Held: *Lebendige Gegenwart*, Martinus Nijhoff, 1966. 『生き生きた現在』新田義弘他 訳、北斗出版、一九八八年
- (2) *ibid.*, S.141. (邦訳「一九七頁」)
- (3) 合田正人『レヴィナスの思想』(国文社、一九八八年)のⅢ-1、および『実存から実存者へ』の訳者、西谷修氏による訳註一七四頁(3)を参照。
- (4) Edmund Husserl: *Husserliana*, Band X, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, Martinus Nijhoff, 1966. 『内的時間意識の現象学』立松弘孝 訳、みすず書房、一九六七年。S.100. (邦訳「一三三頁」)
- (5) *ibid.*
- (6) Klaus Held, *op. cit.*, S.66. (邦訳「九三頁」)
- (7) レヴィナスは「五六年に発表された一連のフッサール論※において明示的に根源的印象と主体性、自我を連帯させている。レヴィナスは、ヒュレー的与件を織り成している感性の志向性に注目して、ここにフッサールは主体性、自我についての新たな概念を呈示している」と見る。レヴィナスは、感じること (*le sentir*) としての感性の志向性は、感じられるもの (*le senti*) についての意識であると同時に、感じられるものと一致するとし、「この一致を「自己と自己との関わり」(*un rapport entre soi et soi*) (EDE140) と見なす。感性の志向性は強い意味での作用とは異なり、非自我へと向かうものではなく、むしろそれ以前に自我それ自身に向かっており、自我の内的関係性を形成している (EDE118)。感性の志向性とは無論、「身体」「時間」の問題へと根ざしている志向性のことである。レヴィナスはここで明示的に根源的印象を自我の存在様式とする。「根源的印象は主体の個体化である」(*ibid.*)。「根源的印象はすぐれて *in* (*in*)」(*in*) であり今 (*le maintenant*) である」(EDE119)。「すぐれて」というのは、それが所与の位置づけではなく、それ以前に主体そのものの位置づけであるからである。対象をではなく、みずからを位置づけ (*se situer*)、みずからを保持すること (*se tenir*) としての主体それ自身の定位が、根源的印象の今において実現される。したがって、レヴィナスにとって根源的印象としての時間は、「主体の分節化」「主体を存在に結び、存在が今から生じることを可能にする第一で根本的な諸関係の輪郭」(*ibid.*) であることになる。これは、『実存から実存者へ』、『時間と他者』で主張される「存在論的図式」としての「実詞化」の時間性と同様な視座である。フッサールにおいて、根源的印象によって今の刻印を捺されたヒュレーも、それと同時にそれに相関的な体験もすぐさま過去去保持へと保持されつつも過去へと転じる。だが、レヴィナスによれば、主体の位置づけとして捉えられた「今」としての「今」は流れ去りつつも常に手前に (*en deca*) とどまっている。主体の位置づけとしての根源的印象の「今」は、単に所与や

レヴィナスにおける「自己」について

体験の流れ去る（過去―今―未来）の系列ないし（「こゝろ」）の連関に属せず、手前へと抜け去る。そして、そこに先反省的な自我の自己「それ自身」への関係が成立している。主体の位置「まごとして」の自我の自己「自身」への関係の「この手前」への運動を、レヴィナスは「意識状態の内存在から発して背後へと超越すること、後越（une *retro-cendance*）」（*ibid.*）と呼び、『イテーン』で与えられた純粹自我の規定としての「内在における超越」を意味変様させている。レヴィナスによればこの「超越」は「内存在」つまり意識の諸体験からその手前への超越。「今」として実現される自我の自己「自身」の「自己関係としての超越」である。だが、この「手前」への超越は「まご」と「まごらず」（自己）の「軌道を逸した濺流」（*extravagance*）に「まごつゝ」に遠くへと延び行くことになる。

※「Réflexion sur la (technique) phénoménologique”, in *Husserl Cahiers de Royaumont, Philosophie*, n°II, p.95-107. (Repris dans EDE, 111-124.)

“La ruine de la représentation”, in *Edmund Husserl 1859-1959*, Martinus Nijhoff, 1959. (Repris dans EDE, 125-135.)

“Intentionalité et métaphysique”, in *Revue philosophique de la France et l’Etranger*, n°149, pp.471-479. (Repris dans EDE, 137-144.)

- (8) Edmund Husserl, *op. cit.*, S.100. (邦訳 一三三頁)
- (9) Klaus Held, *op. cit.*, S.28. (邦訳 四三頁)
- (10) Edmund Husserl, *op. cit.*, *ibid.*, S.67. (邦訳 八八頁)
- (11) *ibid.*, S.106. (邦訳 一四三頁)
- (12) *ibid.*, S.67. (邦訳 八八頁)
- (13) *ibid.*, S.111. (邦訳 一四九頁)
- (14) *ibid.*, S.119. (邦訳 一六四頁)
- (15) Klaus Held, *op. cit.*, *ibid.*